

# 株式会社アサプリ



代表取締役社長 松岡 祐司氏

株式会社アサプリは1963年に創業。現在は㈱アサプリホールディングスのもと、印刷会社3社(㈱アサプリ、㈱プリンター、オリエンタル印刷㈱)が連携したグループ企業となっている。

アサプリグループは総合力を発揮するために、「集中管理システム」や「コストメーター」などを自社開発し、「見える化」による経営の健全化・効率化を進めている。

グループの一躍を担う㈱アサプリは、本年1月、H-UV(ハイブリッドUVシステム)搭載のリスロンS26(菊半裁4色機)を導入。その導入成果について、4社の社長である松岡社長、㈱アサプリの加藤勲人印刷部部門長第一グループ課長、北原誠印刷部第一グループグループ長主任にお聞きした。

## グループ力を発揮するために 超短納期対応のH-UV機を導入。 時間あたりの生産性を大幅に向上。

本社/三重県桑名市安永923  
TEL/0594-23-5471



㈱アサプリ 社屋・工場

### 集中管理により総合力を発揮

アサプリグループは、印刷会社3社の得意技を集結することで総合力を発揮している。(㈱アサプリは多品種・小ロットの広告・販促印刷物、㈱プリンターはオフ輪のチラシ、オリエンタル印刷㈱はページ物をメインとしている。受注した仕事は、3社の一番最適な印刷機で刷るために、集中管理システムによる一元管理を行っている。さらに、「これからは1点1点を单品管理しないと印刷業は生き残っていけない」との考えから、コストメーターという時間管理による自社の原価の把握を行っている。同グループでは、時間あたりの生産性を上げ、正当な収益を生む仕組みづくりを推進している。

同社は、お客様の商品や情報が効果的・魅力的に伝わるよう、常にベストの提案と出来栄を目指し、コスト・品質・センス・レスポンスのすべてに高い水準で応えている。

### 「H-UV機がどうしても欲しい」

H-UV機の見学会に行った㈱アサプリの現場から、「集中管理のためには、短納期対応のH-UV機がどうしても欲しい」との要望が上がってきたという。現場からの要望理由を伺うと、

- 24時間以内の短納期の仕事が多い
- 乾きにくい紙が非常に多い
- 非常にシビアな広告の仕事が多い
- ドライダウンの問題がある
- ブロッキングの問題がある
- 後加工などで障害が生じやすい
- 品質に自信を持って納品したい

●H-UV機を導入すれば、これらが解決でき、集中管理に好循環をもたらす、環境面やオペレータにも優しい。松岡社長は、既存機のリスロンの調子が良かったために、当初は更新に反対であったが、「最新H-UV機の導入により、現場も営業も非常に士気が上がる。この機械を活かして、収益を上げようと社員の気持ちが一つになる」

と判断して導入を決めたという。

松岡社長は、「印刷機の導入には信頼性、修理頻度の低さ、品質の安定性、そして、メーカーが存続することが大事」との考えから、KOMORIのH-UV搭載リスロンS26を導入した。

### 小ロットで台数をこなす機械

松岡社長に、H-UV機の運用方針やメリットについて伺った。

「商業印刷の仕事をH-UV機で行くのがメインです。薄厚兼用機にしていますが、90%が薄紙ですし、H-UV機で刷るのは0.3～0.4までと考えています。枚数の少ないものを台数でこなすことのほうが、この機械には向いていると思います。できればドン天でやっていきます。まだまだインキ代も高いので、部数10,000枚以上の通しものはH-UV機ではなるべくやらないようにしています。

短納期で難しい仕事は、グループ内からH-UV機へ集まってきています。ユボ紙やアルミ蒸着紙などの特殊紙も内製化しました。以前の菊半裁機は2直でしたが、H-UV機は1直で行っています。物にもよりますが、その気になれば1日に30台位はできると思っています」と高く評価されている。

### パウダーレスで速乾、H-UV機がもたらすメリットの多様さ

導入のリスロンS26は、KHS-AIやFull-APCなどを装備し、様々な自動化・省力化が図られている。

加藤課長に導入成果を伺った。「まずパウダーレス、パウダーによる障害がなくなりました。そして速乾、すぐに上が加藤勲人印刷部部門長第一グループ課長。裏移り面の印刷や後加工ができ、裏移りの心配もなく、ドライダウンも考えなくていいので、安心して作業ができます。」

印刷濃度も画面に色表示されるので、一目瞭然でわかる画期的な機械になっています。待ち時間がなく、置いておくスペースもいらぬ。ドン天の仕事では従来機の1/4の時間で済みます。

オペレータとして今まで苦労したところが改善されていて、次の仕事をしなくなる、やっていて楽しい機械です」と、品質向上に集中できる環境を評価された。

H-UV機を担当する北原主任は、「立ち上がり時間や損紙は従来機の1/3になっています。1枚目が出て2分くらいで本北原誠印刷部第一グループ主任。刷りに入れ、4色・1,000枚では版換えから15～20分で完了します。現在は1日に18～20台、通し数1,000～3,000枚の目標は達成していますが、これからは1日25台以上もっていきたいと思っています。」

午前中に入稿した仕事も、昼に印刷・断裁・加工して、その日に納品という、今まででは考えられないようなことができます。また、リピート物はKHS-AIで濃度管理ができますので、前回と同じものが楽に刷れるようになりました」と笑顔で語る。

### 究極のオフセット機の完成型



アサプリグループの総合力を高めるH-UV搭載リスロンS26(菊半裁4色機)

松岡社長に、これからのH-UV機について伺った。

「現在7台の枚葉機が稼働していますが、菊全判・菊半裁のH-UV機2台を2直でやれば、7台分の仕事が行える能力を持っています。H-UV搭載リスロンS26は、10年前の機械と比べると素晴らしく進化し、生産能力も倍になっています。刷出し時間、段取替え時間、いろいろな自動化装置やH-UVという乾燥装置が付いており、ひとつの完成型、いわば究極のオフセットの機械です。今後、油性の印刷機はどんどん少なくなってくると思います。」

しかし、今後はクリアしなければならぬ問題もあります。H-UVは通常のUVに比べて使用電力は少ないですが、大震災による電力不足もあり、さらに抑えた節電仕様に技術を発揮していただきたいというのがメーカーへの希望です。そして、H-UVの導入会社の事例を共通のデータベースにし、誰もが見えるようにすると良いと思っています」と語る松岡社長は、愛知県印刷工業組合の教育委員長、全日本印刷工業組合教育・労務委員を務める立場から、常に印刷業界の発展を視野に入れている。

“印刷を通して、次を期待される企業へ”——常にイノベーションを続ける同社は、H-UV機をグループ総合力の武器として有効活用するために、新たなチャレンジに着手している。